

特集

# 桜島

大正噴火から100年



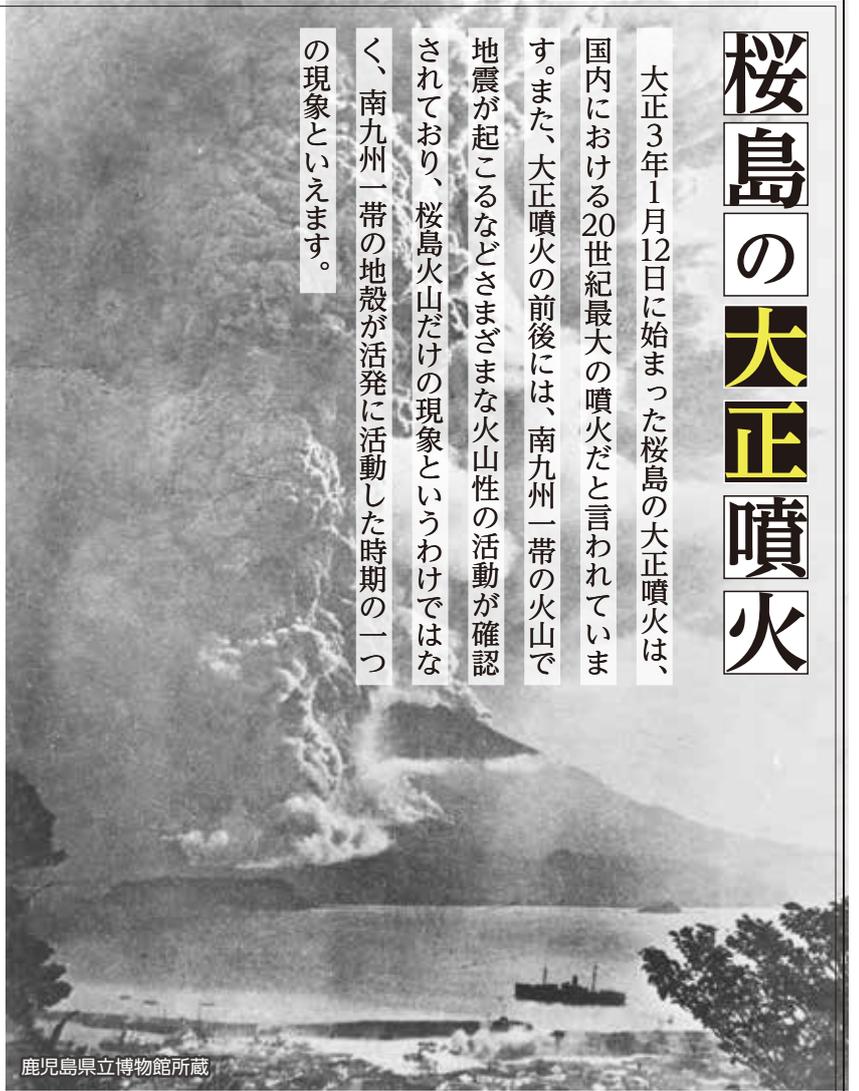
鹿児島市街地から約4キロメートルに位置する、世界有数の活火山「桜島」。現在も活発な活動を続けており、平成24年の爆発回数は885回を数え、観測するようになった昭和30年以降3番目に多い記録となりました。

桜島は今後も活発な活動が継続するとされています。

そして、平成26年1月12日に桜島の大正噴火から100周年を迎えます。

## 桜島の 大正噴火

大正3年1月12日に始まった桜島の大正噴火は、国内における20世紀最大の噴火だと言われている。また、大正噴火の前後には、南九州一帯の火山で地震が起こるなどさまざまな火山性の活動が確認されており、桜島火山だけの現象というわけではなく、南九州一帯の地殻が活発に活動した時期の一つの現象といえます。



鹿児島県立博物館所蔵

### 前兆現象

大規模噴火の発生前から、桜島の島内ではその後の惨事に結びつく数々の異変が起こっていました。

桜島では、大正噴火の1、2カ月前から、一部集落で井戸水の水位が低下し、噴火数日前からは、有感地震も発生しました。

そして、噴火が始まった1月12日の早朝には、低下した井戸水の水位が逆に上昇する、地震が次第に強まるなどの異変が確認されました。

### 噴火

大正3年1月12日午前10時5分、桜島の西山腹から、その約10分後には東山腹から噴火が始まりました。流れ出た溶岩により、

集落は甚大な被害を受け、桜島と大隅半島の間にあった瀬戸海峡は埋められ、桜島と大隅半島は陸続きになりました。噴煙は、上空8000メートル以上にも達し、火山灰は遠く小笠原諸島やロシアのカムチャツカ半島にまで到達しました。そして、太陽の光をも遮り、あたりは暗闇と

化しました。噴火は爆音や雷光、地震を伴いながら翌日まで続きました。



鹿児島県立博物館所蔵

溶岩により埋められた瀬戸海峡

### 噴火のそのとき

鹿児島県立博物館 鈴木敏之学芸主事

大正3年当時、桜島には多くの集落があり、たくさんの方が生活していました。1月12日に大正噴火が起こり、住民は島内から避難しましたが、なかには住み慣れた地から移住を強いられた方もいました。

火山の噴火は、噴煙や噴火音など噴火そのものの脅威だけではなく、その前後に発生する地震や降灰および土石流などにより多くの被害が発生することがあります。この時期の桜島上空は北西の季節風が吹いていたため、大隅半島の各地に、より多量の降灰があり、周辺の住民を苦しめました。

鹿児島県内には大正噴火の様子や教訓などを後世に伝えるための爆発記念碑が各地にあります。それぞれの碑の内容から大正噴火がいかに大変な噴火であったのがわかります。直接の被害が大きかった地域では、

噴火の様子だけではなく、その後、頻繁に発生した土石流などの被害の様子がさまざまなと刻まれている碑もあります。

噴火直後の桜島は地表が溶岩に固められ、田畑を耕すことはできず、日常生活を送ることもできませんでした。噴火から100年近くが経過して、現在では、豊かな緑が再生し、活動を続ける火山のすぐ近くで人が生活しています。また、火山活動や防災の面で、関係機関によりさまざまな角度から研究や予知が行われています。

私たちは、今後も大規模な噴火が起こる可能性が十分にあるということを念頭に置きながら、大正噴火100周年を一つの節目として、これまでの教訓を生かし、避難訓練などを継続して行うなど災害に備え、心構えを持ち続けることが大切です。



黒神埋没鳥居 (鹿児島市黒神町)



爆発記念碑 (鹿児島市照国町)



大正噴火の噴石